

在外教育施設派遣教員 帰国報告資料

建学の精神に学ぶ日本メキシコ学院

前 日本メキシコ学院 日本コース 教諭

後 帯広市立稲田小学校 教諭

氏名 越 智 卓

(派遣期間 平成24年4月～平成26年3月)

1 はじめに

「日本メキシコ学院は日本コースとメキシココースが併設されている。世界でも珍しい国際校です。」私のメキシコ赴任は、代表生徒によるこの言葉から始まった。この言葉こそ日本メキシコ学院が持つ最大の魅力である。

日本コースは一般的な日本人学校であり、メキシココースは現地校である。この二つが一つの学校として成り立っているのが、日本メキシコ学院である。休み時間にはメキシコ人児童生徒と顔を合わせ、互いに挨拶し、運動会などの行事を一緒に行うこともある。併設されているからこそ、どの日本人学校よりも現地人との交流があり、現地理解教育や交流授業も盛んに行っている。

そうした生活の中で、メキシコ人や日本人関係なく人としてのやさしさや尊さに出会えた時の感動は、日本にいるときよりも深く感じることができた。

派遣に際し関わってくれた日本人やメキシコ人、多くの方々への感謝の意を込め、ここに帰国報告を記す。

2 メキシコ並びにメキシコシティ

メキシコ	
国名	メキシコ合衆国 (Estados Unidos Mexicanos エスタドス・ウニョドス・メヒカノス)
首都	メキシコ・シティ (海拔2,240m)
通貨	ペソ (1ペソ→5円前後 1ドル→13.5ペソ前後変動します) 2011年11月現在
人口	約1億700万人
国民	メスティソ(スペイン人とインディヘナの混血)約80%, インディヘナ(先住民族)約10%, スペイン系を中心とした白人約10%と推定される。日系人は約15,000人以上といわれる。
宗教	ローマ・カトリックがほとんど。
経済	石油産業と観光業が外貨獲得の中心。
言語	スペイン語 (メキシコ市内では英語はあまり通じない)
気候	「常春の国」ともたとえられる。年間を通じて温暖で湿度の低い快適な気候。しかし冬は意外に寒い。
夏時間	メキシコではサマータイム制度が導入されており、毎年4月第1日曜日(10月の最終日曜日)まで1時間時刻が早くなる。(時差-15時間, サマータイム-14時間) 日本時間午前9時はメキシコ時間前日午後6時 (サマータイム時前日午後7時)

メキシコシティ (D.F.)	
名称	メキシコ連邦区 (Distrito Federal) , 通称D.F. と呼ぶ。
人口	2,200万人
市街の状況	名実ともに中南米を代表する経済規模を持つ。中心部にはメキシコの大企業の本社のほか、ヨーロッパやアジア、アメリカの多国籍企業のオフィスが林立。また、地下鉄網、高速道路、環状道路、オフィス街やファッション街、高級デパートなど近代的都市機能を十分備えた大都市である。
交通	市内はバス、メトロバス、地下鉄の路線網が発達。またタクシーが市民の足として重宝されている。市内の多くの個所が慢性的に渋滞している。
航空	メキシコ・シティ国際空港 (別名、ベニート・フアレス国際空港)。アエロメヒコ航空が成田からのノンストップ直行便を運行 (最短約13時間)。復路は、ティファナ経由の直行便がある。その他、A.AとUALに、アメリカ経由の乗り継ぎ便がある。
気候	メキシコシティの標高は2240m。典型的な高山気候。亜寒帯気候にも似ている。 ※雨季と乾季があり、雨季は5月～10月頃で夕方スコールがある。乾季にはほとんど雨は降らない。紫外線は強く、帽子、サングラス、UVクリームがあった方がよい。内陸に位置するため、朝夕、かなり冷える。また、10月～1月は日中も多少冷える。(最近は天候が変化してきている)

3 日本メキシコ学院

(1) 設立の経緯

「日本メキシコ学院日本コース」の前身は、メキシコオリンピックの年、1968 (昭和 43) 年 5 月に幼稚園・小学校あわせて 50 名で発足した「メキシコ日本人学校」である。メキシコ市内デルバジェ地区にあった学校は入学希望者の増加によって敷地と校舎が手狭になり移転問題がクローズアップされた。1974 (昭和 49) 年 5 月、メキシコ合衆国のブラボ・アウハ文部大臣が日本を訪問し当時の奥野文部大臣と会談した際、日本・メキシコ両国の子どもたちが同じ敷地内で学べる本格的な国際学校「日本メキシコ学院」の設立が提唱された。そして、その年の 9 月メキシコ合衆国を訪問した田中首相とエチェベリア大統領との会談の結果発せられた共同声明において、早期開設を支援する旨の発表があった。永年にわたって学院建設を熱望していたメキシコ進出企業と日系コロニアの献身的な努力が実り、ついに 1977 (昭和 52) 年 9 月に、現在の「社団法人日本メキシコ学院(LICEO MEXICANO JAPONES, A.C.)」が誕生した。

本学院は、日本コース・メキシココースの 2 コースと文化センターの 3 つのセクションから成り立っている。

日本コース
小学部・中学部があり、日本国文部科学省の定める学習指導要領に準拠した教育を行うとともに、スペイン語・英会話・メキシコ理解学習を実施している。新学年は 4 月から始まり学校週 5 日制、二学期制をとっている。

メキシココース

幼稚部・小学部・中学部・高校部・日本語教育部があり、メキシコ合衆国文部省の定める学習指導要領に準拠した教育（高校部においては、メキシコ国立自治大学の進学基準に準拠した教育）を行うとともに、日本語・日本文化の学習も行う。新年度は8月下旬から始まる。

文化センター部

両コースの中心に位置して架け橋的な役割を果たしている。国際交流室、広報室の3セクション（編集室、道德教育室、生活指導室）に分かれ、両国文化交流の促進を図っている。



メキシコでも充実した教育施設をそろえる日本メキシコ学院。食堂（カフェテリア）、講堂（オーディトリオ）、体育館、室内プール、運動場などがある。

（2）建学の精神

設立当時からの基本理念である建学の精神「日本・メキシコ両国民の相互理解の増進と教育文化の交流を図り、人類の連帯感を育み、世界の平和と繁栄に貢献し得る国際性豊かな、かつ、国民にとって有為な人材を育成すること」の実現を目指し、日本・メキシコ両国の園児・児童・生徒が、同じ敷地内で相親しみ、自国の文化をしっかりと学ぶことと同時に、異文化を学ぶ中で両文化の相違点にも気付き、お互いの国の文化を理解、尊重しようとする資質を身に付けると共に、将来にわたる友好関係を培っていかうとしている。

4 交流授業の実践

学院において、両コースが一緒に参加する行事が数多くある。進行や説明は、日本語とスペイン語の両方を使って行われ、両国の言語や文化に触れることができる。また、合同授業や遊びの時間などの交流活動の企画もある。日本人学校の教員として日本コースの児童生徒に教えることはもちろん、国際校として、メキシココースとの交流授業を行うことも重要視されている。ここに、自身が行った交流授業を中心に授業実践を紹介したい。



(1) 研究の経緯

日本メキシコ学院では、過去に文化交流を目的に両コース間で児童生徒の交流が行われてきた。多くの場合「七夕」や「死者の日」といった両国の年中行事を軸とした交流であった。

年中行事を軸とした交流は、子どもたちに両国の文化の一端に触れさせる機会を与えることができる。一方で、交流が一時的・単発的なものとなりやすく、子どもたちに「国際性」を育む意図的・計画的な交流にまでには至っていないという反省があった。

そこで、2011年度から「国際社会をたくましく生きる力の育成」を研究主題とし、子どもたち同士の継続的な関わりを大切にした学習展開を行うことを目標に、系統立った交流授業の年間計画作成を行った。

(2) 2013年度の研究主題

国際社会をたくましく生きる力の育成

～子どもたち同士の継続的な関わりを大切にした学習展開を通して～

(3) 研究主題の捉え方

2011年度からの研究において、児童および生徒に見られる共通の課題として「メキシココースの児童生徒とのコミュニケーションに対する抵抗感」が見られた。

授業において指導者を介しての意見交換の場は多くあったものの、児童生徒間でコミュニケーションをとることが難しかったことやコミュニケーションの場があったとしても意思の疎通が思うように行えなかったことが原因と考えた。

しかし、「他者理解」の分析ではどの学年でも肯定的な意識の向上が見られたことから、交流授業を継続しコミュニケーションの機会を重ねることによって、抵抗感が減少していくことが予想される。国際社会を生き抜くためには、目の前にある課題に真摯に取り組む姿勢が大切である。それには根気や持続力、忍耐力、責任感が必要である。保護者による学校評価においても、これらは児童生徒に身に付けさせたい資質として挙げられていた。

また、本研究の軸であるメキシココースとの交流においては、継続的な人間関係によって言語や価値観の違いを乗り越え学習課題を解決していくことが国際性を培う上で大切な経験だと考え、上記の研究主題をもとに、「他者との関係作りを大切にしながら、課題をあきらめずに最後までやりぬく資質」の向上を目指した。

(4) 研究の仮説

意図的・計画的な交流を行うことで、児童生徒が互いにコミュニケーションをはかり目の前の学習課題を解決するであろう。

(5) 研究の実践（低学年）

①低学年チームにおける研究の経緯

2012年度の研究では、道徳の交流授業を行い、互いに学び合いながら国際性を育てていくことを

目指した。そこで、低学年チームでは、道徳（思考）と共に活動する学級活動（実践）をスパイラルに取り入れ、道徳性と国際性の向上を目指した。

成果として「スペイン語を話せるようになりたい」「メキシコのことを知りたい」「日本のことを教えたがたい」などといった自発的な気持ち、つまり「自分から関わっていこうとする態度」を向上させることができた。

しかし、それは交流授業の機会を設け目的や手段を明確にした中でのことで、実際の日常生活の中では、関わっていこうという意識が薄く、あいさつを交わすなどの行動が伴っていないという実態も見えてきた。そこで、2013年度研究主題『国際社会をたくましく生きる力の育成～子どもたち同士の継続的な関わりを大切に学習展開を通して～』を受けて、低学年チームでは、子どもたちが実際の日常生活の中でも継続的に関わるために、テーマを持って意図的な交流授業を設定し、日常生活においても積極的に関わっていこうとする態度の向上を目指した。

②児童の実態

日本コースの児童は、両親が共に日本人であれば日本語を母語として生活し、両親のどちらかがメキシコ人であると日本語とスペイン語の両方を使っている。多くの児童は日本語を母語としている。

低学年の児童の生活実態からすると日本の文化や日本の習慣の中で生活しているため、メキシコ文化やスペイン語に触れる経験は少ないと言える。

また、メキシココースの児童とは運動会や死者の日の交流で関わる機会はこれまでにあったものの、運動やゲーム、軽食を共にするにとどまり、子どもたちが相互に主体的に関わる経験はほとんどなかった。そのため、メキシココースと交流するというイメージをもてない児童がほとんどである。

③意識調査

本授業を行うために意識調査を行うと「もっと日本のことが知りたい」に「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた児童が74%いた。このことから日本への興味を示している児童が多数いることがわかる。

一方で、「メキシココース、メキシコのことを知りたい」と答えた児童が45%と半数を下回った。「メキシココースの人と一緒に活動したい」と答えた児童も約半数（53%）にとどまった。児童が生活する上で、メキシコ社会やメキシココースの子どもたちと関わる必要性をさほど感じていないという実態が分かる。普段の学校生活が日本コース内で完結していることや日々の生活が日本人コミュニティ内で完結していることがその要因の一つと推測される。また、日常的に交流の体験が少ないことから、これらの値が低くなったとも考えられる。

「メキシココースの人に自分の思いを伝えられる」に「あてはまらない」と答えた児童が63%に上った。その一方で、「メキシココースの人に日本について教えたい」に「あてはまる」と答えた児童が65%いた。日本のことを伝えたいが、自信やその経験がないことからメキシココースとの関わりに消極的な姿勢がうかがえる。

④目標にせまるための手立て

- ・テーマを持って、物作りや遊びなど体験的な活動を設定すること。
- ・活動内容は、できるだけわかりやすくシンプルなものにすること。
- ・通訳可能な児童を配置したグループを設定し、グループ活動を取り入れること。

⑤実践授業

<ゴール型ゲーム サッカー【体育科 内容項目Eー(1) ア ゴール型ゲーム】の実践>

最初の交流授業だったので、交流しやすい体を動かす活動(サッカー)を取り入れた。サッカーの基本的な動きを理解し、少人数のゲームをすることができることを目標とし、1対1、もしくは2対1のペアをつくり、練習とゲームを行った。

授業の途中で「もっとパスをつなぐためにはどうすればいいか。」と発問すると、日本コースから「声を出す。名前を呼ぶ。」という意見があった。その後、メキシココースの児童に伝えると「パスをもらう時に声を出すともっといい。」という意見の交流があった。

感想では、「最初話するとき、ドキドキしたけど、自分がやっていることをメキシココースが真似をしてくれました。」「メキシココースはスペイン語が話せなくても、行動だけで動いてくれました。」「サッカーでシュートを決めたとき、メキシココースと喜ぶと、とてもうれしかったです。また一緒に遊びたいです。」などと、活動の前には緊張感がうかがえたものの、1対1でもペア交流でお互いに名前と顔がわかり、チームの得点に喜ぶことができていた。しかし、サッカーは取り組めるが、十分にメキシココースの児童と話すことはできず、関わりは少なかった。

次回に向け、交流で使う簡単なスペイン語を事前に確認。1対1の交流だけでなくグループ交流にも取り組むことで、積極的にコミュニケーションをはかる場面を設定した。



<日本の文化を紹介しよう【総合的な学習】の実践>

メキシココースの児童に日本の遊び(割りばしでつぼう、おりがみ、ビー玉遊び、ビュンビュンゴマ)を紹介し、メキシココースの児童が日本の文化に興味を持つことを目標にした。前回授業からの工夫(改善)点として、グループごとに時間を決めて交流するようにし、交流で使う簡単なスペイン語を確認させた。

授業の途中で「もっと交流をより良くするにはどうすればいいか。」と発問を入れた。日本コースから「積極的にスペイン語を話す。」「身振り手振りで伝える。」メキシココースの児童に伝えると「私たちが日本語を使う。」という意見の交流があり、互いに言葉の壁を越えようという意識が高まった。感想では、「メキシココースは日本の遊びを知らないのに、わらってやってくれてうれしかったです。」「今度、メキシココースと会ったらグラッシャスと言います。」「メキシココースはちゃんと私たちのことをわかってくれて、うれしかったです。もっともっといっぱい交流して、楽しい思い出を作りたいです。」と、スペイン語を使って、説明することができたことや、メキシココースの児童が喜んでくれたことで、充実感を覚えることができた。



⑥実践を振り返って

研究では低学年の児童の実態から、1対1のペアによる交流が有効であることが分かった。さらに効率的な交流を生むために日本コース・メキシココースの児童のどちらかに学習上のアドバンテージが必要であることがわかった。

日本コースの教員が主体となって、日本コースのカリキュラムにのっとり交流を行う際には、日本コースの児童に学習上の優位があることが望ましい。低学年の段階から生活科や総合的な学習の時間を通して、体験的にそして十分に日本の文化や風習、遊びに触れさせることで、日本文化を知っているという優位と誇りを子どもたちに形成することができる。その優位と誇りが、「自国の文化や学んできた事柄を相手に伝えたい」という意欲につながると考えられる。

また、今年度は小学部3年生の総合的な学習の時間においてグループによる交流を試みた。その際、交流するグループを明確にすることでグループでの交流も可能であることが分かった。このように児童の発達段階に応じ、ペアによる交流から徐々にグループによる交流へと移行していくことも低学年での実践において大切なことである。

そして、主体的な交流を生むためには、活動において児童の思考・判断を伴う必要がある。限られた交流の機会を有意義なものにするためにも、授業の中盤において指導を行うことが有効であることが分かった。授業の途中で、望ましい関わり方をしている児童、積極的に関わりをもとうとしている児童を称賛し、全体に示すことで子どもたちは交流の「モデル」をイメージすることができる。その中で児童なりの工夫、感想を発表させ、適切に評価することで、その後の学習をめあての達成に近づけることができることを確認できた。

「交流授業」と聞くと、日本人学校の児童と現地校の児童と一緒に授業をする姿しか想像できなかったが、一緒に活動するためには、普段の授業では考えない工夫や手だてが必要になってくることがわかり、大変勉強になった実践であった。

5 メキシコ生活

①信愛なるケ・パドレス

メキシコ生活を充実させてくれた一つにサッカーがあった。メキシコに在住する30～40代の日本人を中心とする社会人チームに加入させてもらった。各会社のサッカーチームと連絡を取り合い、月に2回程度試合を行った。

2年目にはチームキャプテンを努め、どのように活動すべきか考えた。自分はチームの方針として、「一生懸命プレーし、サッカーを全力で楽しむ」をモットーとした。経験や技術を問わず、ひたすらサッカーと向き合うことを求めたことで、プレーに集中することができ、チームは勝利を重ねることができた。

互いの絆も深まり、素晴らしい仲間との出会いであった。



②心に響いたメキシココース校長の言葉

日本メキシコ学院では、メキシコ人と日本人と一緒に運動会を行っている。ある日の練習でメキシコ

コースの児童が騒がしくなった時に、メキシココースの校長先生が壇上で「協力して静かにしましょう。」と児童を静かにしてくれた。

運動会のように集団で行動するには、話を聞く、整列することを会場にいる全員が協力することで行うことができる。「静かにする」ことの本質が「協力する」であることに気づかされた瞬間であった。

些細な一言だったが、その意味を改めて考えることができた。教育者として、人として素晴らしい方だった。

③ 大家さんのやさしさ

派遣教員は賃貸住宅に住むが、壁や水回りのトラブルが後を絶たず、修理する際は大家さんとの関係がとても大切である。私の住んでいた住宅の大家さんは、いつも手作りのお菓子をもって家賃を取りに来てくれた。まだスペイン語が上手でない時は、英語の話せる高校生のお兄さんを連れて来てくれたり、水回りでトラブルがあると、すぐに業者を呼んで直しに来てくれたりした。こうした対応も他の派遣教員ではなかなかスムーズにいかないようで、改めて大家さんに感謝したい。



赴任中、大きなトラブルもなく（断水や停電は数回…）無事に帰任できたのも、こうした現地の人のやさしさがあったからこそと感じる。国や文化が違っても、人のやさしさは変わらない。強く思うことができた。

6 おわりに

建学の精神のもと、日本人とメキシコ人が同じ敷地で学習する世界でも珍しい国際校、日本メキシコ学院。この珍しい学校が存在する理由の一つにメキシコと日本との友好関係がある。1609年、千葉県御宿沖で、フィリピンからメキシコに向かう船が座礁した。これを見た千葉県御宿の人たちが献身的に介抱を行ったことから交流が始まった。400年の歴史の始まりは「人としてのやさしさ」であった。

在外施設での仕事は決して楽しいことだけではない。しかし、どんな国でもどんな人でも、大切にすべきことは「人としてのやさしさ」であることを、日本メキシコ学院は教えてくれた。教育の目的が人格の完成であることは、日本でもメキシコでも変わらない。

「皆さんは異文化を理解し、グローバル人材へと成長していくでしょう。高い学力を身に付けていく人もいるでしょう。たくさんのお金を動かす人になるかもしれません。大きな権力を持つ人もいるでしょう。でもその力は弱い人のために使ってください。」帰任の挨拶を終え、私はメキシコを後にした。

この派遣に関わり、お世話になった関係各位に心から感謝するとともに、世界でも珍しい国際校「日本メキシコ学院」の更なる発展を願い、本報告のまとめとしたい。

参考文献 2013年度 日本メキシコ学院 日本コース 研究紀要 『国際社会をたくましく生きる力の育成 ～子どもたち同士の継続的な関わりを大切にしたい学習展開を通して』